の書に出たるを玄らず、俗にその本命を、七ッ目とて數るもこれに似たり、疑らくはこの說も、予が九々によりて、九よりこれを數ふといふに等しく、童蒙の解易からん爲には理あるに似たれど、古書を引くにあらざれば、君子は取るべからず、且くこゝに錄してもて博識の客を俟、

〔萬葉集四相聞〕笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首○中略皆人乎、宿與殿金者、打禮杼、君乎之念者、寢不勝鴨、

〔年山紀聞六〕ねよとの鐘

御釋云、宿與殿金は亥の時の鐘なり、日本紀天武紀云、十三年冬十月己卯朔壬辰、逮于人定大地震、これ同じ日本紀に、日沒を酉の時とし、昏時を戌の時とよめるごとく、亥の時に人寢て定まれば、かくは義訓せり、

〔枕草子八〕故殿の御ぶくのころ、六月卅日の御はらへといふ事に出させ給ふべきを、玄きの御ざうしは方あしとて、官のつかさのあいたん所にわたらせ給へり、其夜はさばかりあつく、わりなきやみにて、何事もせばふかはらぶきにてさまこと也、○中略時づかさなどは、たゞかたはらにて、かねの音もれいには似ずきこゆるをゆかしがりて、わかき人々二十餘人ばかり、そなたにゆきてはしりよりたかきやにのぼりたるを、これより見あぐれば、うすにびのもからぎぬ、おなじ色のひとへがさね、紅の袴どもをきてのぼり立たるは、いと天人などこそえいふまじけれど、そらよりおりたるにやとぞ見ゆる、おなじわかさなれど、をしあげられたる人は、えまじらで、うらやましげに見あげたるもおかし、

〔中右記〕嘉保元年十一月十一日、早旦參結政、外記門前、外記廣忠、史盛忠、宣行、三人出向云、陰陽寮鐘頻報、定知刻限移、仍退出也者、

〔今昔物語三十一〕愛宕寺鑄鐘語第十九